

『ツーリズム研究年報』所収論文・解説と 翻訳

「自己と《他者》—旅行者、民族誌家、ツーリスト」（ヴァ ジリキ・ガラニ＝ムタフィ著）について

（解説と翻訳）神戸夙川学院大学観光文化学部講師 伊多波 宗周

【目次】

1. 解説

2. 翻訳

序論

近代およびポストモダンにおける旅行

ヴィクトリア時代の旅行と人類学的進化論

ギリシア的古代世界

ツーリストの旅行

民族誌家の旅行

ポストモダンにおける旅行

結論

参考文献

1. 解説

本稿は、ギリシア・エーゲ海大学（University of the Aegean）の社会人類学者 Vasiliki Galani-Moutafi が、*Annals of Tourism Research*, Vol.27, No.1, 2000, pp.203-224 において発表した、*The Self and the Other—Traveler, Ethnographer, Tourist* の解説と全訳である。

10年以上前の論考であるが、Cohen, E.H.や Tribe, J. など、理論的ツーリズム研究の先鋭によるものを含む 26 点の論文において引用されており（2011 年 4 月現在）、翻訳の価値がある論文だと言える。また、著者の参考文献には、Boorstin, D.J., Bruner, Ed, MacCannell, D., Rojek, C.そして Urry, J.ら、ツーリズム理論を研究する

上で必読のものが含まれており、20 世紀後半以降のツーリズム理論を振り返るという意味でも、翻訳する価値があるだろう。さらに、訳者の専門である 19 世紀社会哲学との関連においても、旅の経験における自己と《他者》の関係、およびその変化（とりわけ、マス・ツーリズムや人類学の成立する 19 世紀における変化）について論じる本論には、「ツーリズムの哲学」を構築していく上での重要性があると考えられる。

翻訳に先立ち、①この論文の基本的性格と位置づけ、②読解にあたって注意すべきこと、③表記について、若干の解説をしておく。

①まず、この論文の基本的性格であるが、主に著者のフィールドであるギリシアに関して、そこを旅した者たちが、どのような言説を提示してきたのかを、事例とともに紹介するという種類の実証研究である。とはいえ、2000 年代になって盛んになる「語り」と観光経験との関係¹⁾、およびツーリズムとアイデンティティの形成・変容との関係²⁾について、かなり早い段階で議論したという意味で、21 世紀の理論的ツーリズム研究の先駆的な仕事の一つだと言えるものである。

②次に、読解にあたっての注意点である。タイトルにもあるように、本論は、旅行者 (traveler)、民族誌家 (ethnographer)、ツーリスト (tourist) の旅行における《他者》経験の違いについて述べたものである。また、本論部分が「近代とポストモダンにおける旅行」と題されているように、近代初期、19 世紀後半以降の近代、ポストモダンにおける旅行の意味の変遷をたど

るといふ論にもなっている。詳細については、翻訳に委ねるとして、ごく大雑把に言えば、本論の主要な比較は、a) 近代初期の旅行者、b) 19世紀後半以降のツーリスト、c) ポストモダンの民族誌家の間で為されており、それぞれのキーワードは、a) ロマン主義、b) 大衆性、c) 自己再帰性である。議論の筋が見えにくい箇所もあるので、そのような大筋を念頭に置いた方が読解しやすいだろう。

③最後に、表記について。ガラニウムタフィは、一貫して「他者」を大文字で始めて“Other”と表記している。これは、「自分ではない人間」「他人」という一般的な意味での「他者」ではなく、とりわけ20世紀後半に人文社会科学においてキーワード化した「異文化の人々」というニュアンスを帯びた「他者」のことを指すためである。それゆえ、訳出する際、《他者》と表記した。また、本論文における“tourism”・“tourist”は、「観光」・「観光客」と訳しても問題のないケースがほとんどであるが、語の持つニュアンスに意識がいくように、一貫して「ツーリズム」・「ツーリスト」と訳した。なお、日本語としての読みやすさを考慮して、特に哲学・思想系の専門用語であっても、原語を併記することはしなかったが、理論的ツーリズム研究にとっての最重要概念に関しては、括弧内に原語を表記した。

2. 翻訳 序論

本論は、旅行者の語り (narrative)、民族誌的实践、ツーリズムの言説という三領域における事例を示すことによって、他所や《他者》へのまなざしから、自己発見と自己表象が生まれるプロセスに光を当てることを目的とする。民族誌家、旅行者、ツーリストという三つのグループの間で、いわゆる《他者》との出会いが、どれくらい似ていて、どれくらい似ていないのかについて、彼らが旅行経験をどのように生きるのか、また、自分自身と《他者》の表象をどのように創りあげるのか、という見地から問う。三者の旅は、いずれも地理的・文化的な境界を越えていくものであるが、ツーリストと旅行者の実践とイメージは、自己再帰的

パラダイムの枠内にいる人類学者が、《他者》へとまなざしを向けるときに得るようなタイプの自己意識に必ずしも達するわけではないことを示唆している。

さまざまな土地を通り、個人的・文化的境界を越えていく探検家、宣教師、入植者、兵員、移住者、移民、亡命者、召使い、人類学者、ツーリストは、それぞれに旅行の歴史を持っている。けれど、いくつかの例外、とりわけ巡礼における例外を除き、旅行者の地位は、主として、英雄的動機、教育や学問上の目的、そして気晴らし目的で旅に出る裕福な白人のヨーロッパ人男性のものと定まっていた。西洋の言説において、移民労働者、召使い、難民の空間移動の実践は、人種および階級が理由となって、旅行と見なされてこなかった (Clifford 1997:32-33)。非白人および白人の下層階級の男女において、居場所を変えることは、まったく不本意な種類の移動を意味するものであった。つまり、それは何らか別の理由を持つことに特徴づけられ、おそらく冒険、学び、探検、気ままさに欠ける経験であったのだ。このような社会的カテゴリーに属する諸個人の経験は、彼らが日記や書物、旅行談を残さなかったために、また社会科学の文献において適切に表現されなかったために、無視され、誤解されてきたのだ。しかし、いかに考えられようとも、旅行は歴史的に、富裕な者とそうでない者の両者を含み込んでおり、人々を家から離れさせるさまざまな文化的、政治的、経済的な衝動を問題にするべきである。

西洋の歴史において、人々が旅行するのには、多くの理由があった。巡礼を通じた宗教的経験の追求、冒険の追求、それから、植民地の拡大・そこへの移住という状況での経済的・社会的進出、商業の拡大や貿易の実施に関連した理由、さらには迫害からの亡命における避難場所の追求といったものである。冒険する者、放浪する者であると共に、初期の旅行者たちは、人類学者の原型、ツーリストの原型という性格を帯びていた (Crick 1985:76)。その理由は、人類学の前史および初期の歴史に関わるもので、人類学者とツーリストを結びつける関係ゆえのものでもある。人類学者とツーリストは、共通の起源を持っており、その起源は、

探検家、宣教師、商人、そして旅行者へと遡ることが可能なものである。旅行者、人類学者、そして経験の多様な質を基礎とするツーリストを比較することにより、旅が、自己と《他者》とを区別しようとする試みを認めるか否かの条件を際立たせることができる。本論は、旅行の生きられた経験、《他者》との出会い、自己と《他者》との関係、旅行の言説という文脈における自己の産出（提示）といったことを参照し、三者の類似点と相違点に焦点を当てる。

次のように論じることにも可能である。すなわち、旅は、ある場所から他の場所へと移動するだけでなく、旅する自己が、絶えず見知ったものとそうでないものとの間での交渉、この場所、あの場所、その他の場所の間での交渉をしなければならぬことで、さらなる旅の実践に入っていくかもしれないときに、諸々の境界を再設定することを促すような潜在力を持っているのだ、と (Minh-ha 1994:9)。さらに、旅行者が経験を手に入れ、変容を経験することを考えるならば、旅は、一種の時間の経過と捉えられてもよい。時間と空間の重層的次元により、旅は、自己と《他者》とを同時に発見することを象徴する有力なメタファーになる。「内面の旅 (inward voyage)」を可能にするのは、明らかに、このような内的次元と外的次元を同時に写し出す能力である。それによって、地理的空間移動は、内観のプロセスに似たものへと変容させられる。クリフォードが述べたように、「旅は、意識に到達したときに意味を持つ」(Clifford 1988:167)。語りのプロセスにおいて経験を構造化し、意味を与える叙述を通じて、旅行者は自己とアイデンティティのイメージを生み出す仕方で、自らの旅について考えをめぐらすことができるのだ (Neuman 1992:177-178)。本論は、アイデンティティを生み出す自己についての語りに光を当てる努力をしつつ、旅行、民族誌、ツーリズムという三領域の事例を提示する。

方々へと赴く人々を話題にするのが重要なのは、境界、内側と外側、距離と差異といった諸概念、すなわち自己の構築と再調整の構成要素となる諸概念に関係するからである。つまり、それが何ではないのか、あ

るいは、それは何を明確に欠いているのかに関し、《他者》との関係という文脈においてのみ、「アイデンティティ」は産出され、概念化するるのである (Butler 1993; Derrida 1981; Laclau 1990)。事実、精神分析学の用語で言えば、また、ラカンの問題系に基づいて言えば、自己は、《他者》の鏡像を通じて構築されるのだ。自己理解に達するのは、彼/彼女が、誰と異なる自己理解をするのかによる。アイデンティティは、言語—ラカンによれば無意識のものである—と類似した仕方で構築される。すなわち、言語コードの単語間における類似と差異の諸関係において、意味の割り当てがなされるのだ。デリダのような言語哲学者は、話者は固定的で不変の意味—アイデンティティの意味も含まれる—を生み出すことはできないと論じる。なぜなら、概念化はその本性からして、何らかの変動的なものだからである。概念化は、(アイデンティティの) 安定と統合を追求するが、(差異によって) 絶えず切断され、変容させられる。一般的に、アイデンティティ構築のプロセスは、差異の「戯れ」に従属し、象徴的な境界線を引き出すことを前提としているのだ。

近代およびポストモダンにおける旅行

近代において、旅行の実践および、それが経験した変化は、多様な文脈で辿ることができる。すなわち、実地の専門的研究者の出現に先立つ、人類学者の異国風だったり原始的だったりする表象、ヴィクトリア時代に (ギリシアのような) 地中海世界を訪れた旅行者によって書かれた報告書、マス・ツーリズムから生じた目的地と旅行する自己についてのイメージ、そして、人類学者の旅と、その探検的性質について、民族誌によって発表された情報といった文脈である。

ヴィクトリア時代の旅行と人類学的進化論

他者性の構築と自己の形成は、フィールドワークを中心とする人類学の実践の精髓を危うくする。フィールドワークの世界において、民族誌は、個人間・文化間における《他者》との出会いから生まれるものである。しかしながら、学問上のフィールドが、西洋と非

西洋の間に歴史的に構築された区分に基づいて設定されているので、人類学とは、何よりもまず、西洋の自己による非西洋の《他者》の研究であった。そのような設定に加え、19世紀後半になると、人類学は、それまで哲学や文学、ヴィクトリア時代の旅行者や宣教師による書誌によって担われていた、より広いテーマ領域である「未開」の空間についてもカヴァーすることになった。リチャード・バートン、デイヴィッド・リビングストン、ヘンリー・スタンリーは、そうしたヴィクトリア時代における旅行書の著者を代表する存在である。たとえば、リビングストンのよく知られた作品である『南アフリカにおける宣教師の旅と探検』（1857）は、大部分、4年におよぶ南アフリカでの放浪に当てられている。原始的な《他者》を表象しようとする初期の人類学者の試みは、後に、主にマス・メディアとツーリズム広告に引き継がれた。そして、それらは、民族誌の現在、すなわち、もはやコロニアリズムのものではなく、民族誌によって捨て去られているような論証的空間を支配する状況になっている。

西洋の旅行の伝統において、探検家、宣教師、入植者、自然科学者は、実地の人類学専門家の出現に先立って存在していた。しかしながら、彼らは、19世紀後半の、実地に赴かない人類学者たちの思考に影響を与える多くの仕事をなした。ヴィクトリア時代の旅行者とキリスト教の宣教師は、さまざまな活動（たとえば商業的活動）上の理由のみならず、未知の土地の人々との初対面という経験をする目的をもって遠い大地を訪れた、非専門的な観察者たちだったのだ。この経験は、歴史的な見地からしても、感情的な見地からしても、明らかにロマン主義的な次元を持っていた。最初に民族誌的報告をした人々は、このような非専門的観察者の伝統に属していて、彼らの報告が、エドワード・タイラー、ルイス・モーガン、ジェームズ・フレイザーといった首都ロンドンの学者たちによって用いられるに至ったのだ。

この時代の民族誌的研究の著者（すなわち、宣教師であったロバート・モファット、デイヴィッド・リビングストン、ヘンリー・キャラウェイら）の「公式

の」（学問上の）聴衆は、科学の一分野として人類学を確立することで意見が一致する、進化論の「主流」を代表していた（Thornton 1983:504）。方法に関して言えば、そこには情報の提供者（「実地の」観察者）と首都の分析者との間に分業が成立していた。情報の提供者は、学問の世界において学者に伝える必要から、彼らの報告を「科学的」なものとして示した。それゆえ、彼らの資料の内容は、固有で再生産不可能な観察と、《他者》との出会いの経験であるのだが、にもかかわらず、普遍的で、見かけ上は客観的な科学の一部分として示されたのだった。このようにして、民族誌は学問になった。そこで明らかにされなかったのは、それぞれの民族誌が、どのような条件のもとで作られたのか、特に、著者が何に巻き込まれているのかと、どのような態度であるのか—間主観的、道徳的、政治的な—であった（Thornton 1983:517）。

ヴィクトリア時代のヨーロッパにおいて、宣教師とコロニアリストの道徳的な不安は、19世紀を通じて栄えた進化論、社会の道徳的分類のための論理を提供した進化論へと、完璧な適合性を見出した。しかし、ダーウィニズムの理論家と支持者にとって、非科学的で、道徳的で、無窮の分類こそが、すなわち、聖書あるいは社会的ダーウィニズムによって暗示され、ヨーロッパ人にアイデンティティを提供するだけでなく、彼らの行動をも正当化するような分類こそが重要であるのは明らかだった。当時のヨーロッパの知識層に対して、《他者》は、進化の過程で西洋社会が除去した、はるか昔のあらゆる欠陥の生きた標本を提供したのだ（Tyler 1986:127-128）。実地に赴かない人類学者たちは、時間と道徳性に関する階層的な基準にしたがい諸社会を分類しようとする、一直線モデルのレンズを通じて、原始の、「歴史」を持たない《他者》を眺めた（McGrane 1989:93）。原始の社会は、それを通じてはるか昔の西洋社会に旅ができ、人類の子ども時代へと戻ることができるタイム・マシーンとして用いられたのだ。このように、人類学的進化論において、《他者》は、見本として、また、時間の外のものとして見出されたのだ。さらに、他者性の理解は、旅行の結果とし

てのものではなく、むしろ、旅行そのものが、《他者》について既に構築されたイメージを前提としたものであったのだ (Fabian 1983:121)。最後に、18 世紀および人類学的進化論の時代において、旅行は、《他者》の私物化および収集にも結びついていた。もちろん、収集活動と私物化は、原始の世界に対してのみ行われるとは限らない。というのも、それらは、ギリシア・ローマ的古代と結びついた地中海地域においても幅広く行われたからだ。地中海地域に関して、とりわけ興味深いのは、過去への旅行者たちが、それほど遠くない《他者》を、彼らの先祖として位置づけるのを目的に、古代へと接近した点である。

ギリシア的古代世界

西欧の旅行の伝統の枠内において、地中海地域は、旅行者が自身のルーツを探るための鏡として用立ったが、実際には明らかな違いによって区別される。ギリシアに関して言えば、19 世紀ヨーロッパの旅行報告書を考慮すると、その曖昧な地位は、ヨーロッパの「辺境にある」という、その位置に由来する (Herzfeld 1987)。18・19 世紀にギリシアを訪れた多くの旅行者の物語的報告は、「親密な」ものと「疎遠な」ものとの区別に関して、実に曖昧な考えを示しており、考古学的財宝を手に入れようという強迫観念をさらけ出しつつ、旅がいかにか自己理解とアイデンティティの構築を促しうるかを示して、自己と《他者》の関係に光を当てようとしている。これらのうちの最後のものにより、多くの旅行者は、学術的 (古典的) ヘレニズムを、その起源となった場所と結びつけ、時間を捨象することで、想像された過去の壮大さを現在において経験することができるのだ。この種の態度は、18 世紀後半にギリシアへ旅行したフランスの外交官、マリー＝ガブリエル・ドゥ・ショワスル＝グフィエの記した、次の一節に見て取ることができる。

ギリシアを訪れるためにパリを出発したとき、私はただ、古代のとても有名な場所に対する、若い頃からの熱情を満たしたかったのだ。私は前もって、この美しく、華々しい地域を見て回

る楽しみをホメロスやヘロドトスの書を手にも味わい、詩人のイメージのうちに描かれた豊かな美を、より鮮明に感じる楽しみを味わっていたのだ。 (Augustinons 1994:163)

旅の間に出合った、さまざまな出来事を記録し、叙述しながら、この旅行者は、どのような自伝よりもずっと包括的な自己についての像を示すことができたのだ。このような例として、『パリからイエルサレム、イエルサレムからパリの旅行案内』(1811) という、10 ヶ月におよぶ地中海沿岸を巡る旅を記した書において、フランソワ・シャトーブリアンが次のように述べているものが挙げられる。「私は、パルテノン神殿やイエルサレムを、ピンドス³の子孫として、また、イエルサレムへの十字軍戦士として訪れようとしていた」 (Augustinons 1994:185)。とりわけこの本において、著者のアイデンティティが、互いに刺激し合う外的世界と内的自己の間のダイナミックな関係を通じて構築されている。自己の肖像を描こうとする試みにおいて、シャトーブリアンは、旅を、メタファーとして、特に重要な伝説や歴史的事件を記憶の内で覚醒させる、風景の内に焼き付けられた象徴の源泉として用いた。彼は、東方への自分の旅を、巡礼の代表、同胞の使節として見ており、その熱情と信仰を生きたのだ。彼の聖地への訪問の記述を参照しよう。

私は、ゴドフロワ、リシャール、ジョワンヴィル、クシが私のように訪れた沿岸に触れようとした。私は凡庸な巡礼者ではあるが、多くの著名な巡礼者によって聖化された土をあえて踏んでもいいものだろうか。少なくとも、私もまた信念と信義を持ちあわせている。これらの性質の力によって、私も、かつての十字軍兵士たちに認められんことを。 (Augustinons 1994:216)

もちろん、シャトーブリアンは宗教的な巡礼者ではなく、文学的な巡礼者であり、彼のオリエントへの旅は、何よりもまず個人的な探検であった。それは、現在の否定と過去のユートピアへの没入であったのと同様、外的というよりも、内面の冒険だったのだ。彼は、自

らの意識と記憶の中に過去を償還し、その努力において、物理的世界は彼に必要な自己拡張の媒体を与えているのだ。それゆえ、シャトーブリアンの焦点は、主に歴史的な遺跡や記念碑といった、過去の印が刻まれたものに合わされ、対して、現代のギリシア人たちは、彼の関心の表層にしか入ってこない。このシャトーブリアンの著作のような仕事から、過去への旅に見込まれるものには、旅行者が新しい仕方自己認識を生き、それを発展させる可能性が含まれていると推論される。

一般に、マス・ツーリズムの登場以前にギリシアに訪れた旅行者たちの語りは、考古学的財宝を手に入れようとする熱情のほか、我慢、抵抗、忍耐のみならず、高慢、尊大、自己中心性といった形で自己イメージを生み出していた。これらの報告において、「親密—疎遠」という基礎的な対照の反転にも注意すべきである。古代の世界は、見知らぬものではなくて、親密なものであり、それは旅行者を彼の青年期へと連れ戻す。したがって、古代世界は精神的故郷、彼／彼女自身の内に持っている過去としてあるのだ。しかし、現在と過去の関係もまた反転している。過去の記憶への没入は、現在の否認を要求する。その最大の理由は、「我々」と視同されないものこそ、現在だからである。たとえば、ヨハン・バツハオーフェンは、1851年に出版されたロマン主義的色彩の濃い『ギリシアへの旅』の中で、現代のギリシア人たちが見せる、意識されずに継承されたある特性のうちに、古代ギリシアとの連続性を見ている。しかしながら、同時に、現在のギリシア人たちの思考法においても、意識においても、古代との断絶をも見ているのだ（Andonopoulou 1997:35-36）。ギリシアについての観念と現実との間の衝撃的な対立は、グフィエのことも幻滅させた。グフィエは、古代を想起させる光景から瞑想することによってのみ、喜びを得たと報告している。シフノス島の老人の集団が、外国からの訪問者に対して、熱心に外の世界のニュースを訊いたことが、グフィエに古代の光景を喚起した。

私は、ギリシアの美しき時代にやって来たのだと思った。ポル

チコ、人々が恭しく静かに耳を傾ける、よく知られた老人の集団、彼らの顔つき、衣服、言葉、そのすべてにより、私はアテナイやコリントスを思い起こした。（Andonopoulou 1994 : 166）

これらの例は、旅行者が、ギリシアの古代と近代との関係に連続した線を見出すことができない場合においてのみ、（ギリシアの）現在を認識していることを示唆する。そのような現在は、彼／彼女によって、「疎遠な」（つまり、予見不能で、風変わりで、好ましくない）ものカテゴリーに入れられ、「我々」のカテゴリーから距離を置いたものとして留められる。次のように論じることできるだろう。すなわち、旅行者の語りは、筆者を《他者》へとさらし、それによって、自己の発見を可能にするのだ、と。したがって、語りは、旅行者が会うものではなく、英雄的旅行者についての情報を主にとりあげるのだ、と。旅行者が実際に会う人は、筆者の経験を通じてしか現れず、あるがままの諸個人としては現れないのだ。「疎遠な」という語に関して言えば、その意味は、境界の構築に関係しており、排除という目的に動機づけられている。「疎遠な」ものとして性格づけることは、自身のものとして保護したいあらゆるものから《他者》を排除する手段、すなわち、自己を限定する手段である。20世紀に至るまで、「疎遠な」ものは、ツーリストに便利のように、国際的交流と広告媒体によって構築され、企図されていたのだ。

ツーリストの旅行

19世紀終わりには、マス・ツーリズムの勃興により、旅行が衰退した時代であると考えられている。この時代は、ツーリズムの民主化と商業化のプロセスが始まった時代である（Boorstin, 1964）。学術的に設定された、旅行とツーリズムとの概念的区分という文脈で言えば、旅行者が、区別、尊敬、趣向に関する諸価値を備えているのに対し、ツーリストは、非冒険的で、主体性と差別意識を持たない存在である。旅行が、自己実現の努力のうちに源泉を持つのに対し、ツーリズム

は、もともと持っていた世界観を変形することよりも、それを強固にするものと考えられる (Rojek 1993:175)。確かに、今日ギリシアを訪れる多くのツーリストは、彼らの経験の中で、ツーリズムと文化とを結びつけておらず、これは、過去の旅行者たちと異なる点である。そのようなツーリストは、楽しむことに熱中しており、西洋の古典的心像というレンズを通して、現代のギリシアの文化のあり方を「読む」ということはしない。ツーリストは基本的に、美的に魅力あるものを探し求めつつ、「堅い」像は避けようとするため、結局、古典的な部分よりも、感覚への刺激に結びついたギリシア観を持つことになる。大衆的娯楽をハイ・カルチャーと分けることが近代の特性であり、その特性は分割の社会的実践と規則がはっきりとしているべきだと主張する。たとえば、公的生活と私的生活の、内と外の、芸術と生活の、といった形で (Rojek and Urry 1997:3)。ツーリストのまなざし (tourist gaze) が記号を通して構築されるとするならば、ツーリスト文学における近代ギリシアの肖像は、次のものの混合物である。砂浜、レトシナ (樹脂の香り付けをしたギリシア・ワイン)、ウゾ (リキュール)、ブズキ (マンドリンのようなもの)、シルタキ (ダンスの種類) の出演者やダンサー、そしてパルテノンの象徴、といったものである。この種のまなざしは、主に、遊びと楽しみの言説によって「権威づけられる」が、これは、シャトーブリアンのような、教育の言説に埋め込まれた旅行者の言説と、好対照をなすものである (後者は、自己実現の高度な経験をもたらそうとする)。

アーリ (1990:86-87) にしたがって、次のようにも論じることができるだろう。ヴィクトリア時代のギリシアへの旅行者は、古代の光景や素晴らしい風景を「単独で」鑑賞することが文化的資本を要求するという「ロマン主義的」まなざしを体現していた。対して、今日ギリシアを訪れるマス・ツーリストは、「集合的な」ツーリストのまなざしを体現している。そして、後者は、大衆娯楽に方向づけられており、エリート主義や私的な観想を退け、高度の大衆参加を目指している、と。このことは、伝統的な美的属性ではなく、直接的で、

楽しみを伴うインパクトを通じて聴衆に感銘を与えるというポストモダンの文化傾向の典型である。さらに興味深いのは、ギリシアのツーリズムのイメージを創りあげる記号の中には、ツーリズムの言説以外でも、しばしば用いられるものがあるという点である。それらの言説は、ギリシアの外部で生み出されたものであるが、ギリシアに位置づけられ、そこで実行に移されるマーケティング・プログラムや、商品の実利に適っている。かくして、アメリカのスポンサーがついたギリシアにおける短期留学プログラムのウェブ・ページは、次のような文句から始まる。

ギリシア、あるいは古代から知られた名で言えば、ヘラスは、私たちのあらゆる感覚に語りかけてくる壮大な国です。エーゲ海の透き通った水を見渡して建てられた古い寺院…、フェタ (白チーズ) と混じりけのないオリーブ・オイルに包まれたトマト…、屋外でのダンスつきのブズキ、ヴァイオリン、そしてライア…、岩だらけの山頂に座る野生の山羊たち。これらは、ギリシアの島々に特有の文化的・自然的風景の貴重なイメージの、ほんの一部に過ぎません。 (http://www.worldlearning.org/csa/europe/greece_pom.html)

まさにこのようなプログラムが、教育とツーリズムという、近代の文化においてはっきりと分けられていた二つのものの境界が崩壊したことの典型例である。プログラムの哲学と、マーケティングのレトリックの背景にある考えは、教育 (そして、それが伴う「ワーク」の種類) は非伝統的な環境と状況においてなされるというものである (異国における旅行および、ホスト・ファミリーとの生活において)。また、「ゆっくりとした」経験を許容できるという考えでもある。この基本的方向性は、空間と諸機能の脱差異化の証となっており、ポストモダンの主要な特性の一つである (Rojek 1993:188)。

ツーリストたちは、主として大衆文化の表象と、ツーリズムに関する言説によって生み出された既成のイメージとともに旅を始めるが、彼らは、自らの美意識を侵犯されない程度において、彼らにとって親密な世

界のものとは異なる演出に身を呈し、楽しむことをも期待している。支配的な言説によって示された方向に従った、象徴的で構造的なプロセスの体系を通じて、ある場所は、ツーリズム・サイトへと変形される。そのような言説は、ツーリストが訪れる場所を「読み解き」、「私物化し」、「搾取する」方法に影響を与える。美に関する私物化に適するよう考慮された場所となるためには、日々の生活から、その自然的、歴史的、文化的な特別さの点で、区別されなければならない。支配的な語りや、そのような場所を制御するとき、その場所は、ツーリズムの対象物となる。次に見るのは、いかにしてツーリズム産業が、ある土地を紹介し、広告が「異国風の」世界を喚起して、ツーリストを惹きつけようとするかの例である。ギリシアの旅行雑誌にある次の一節は、「キューバ、葉巻、ラム、そしてシュルレアリスム」という題のもとに、キューバを紹介する語りである。

キューバは深くフィデル・カストロのことを信じていて、経済的改革への歩みを進めています。キューバは夢見ている、あなたに夢を見させもします。至るところに見られる過去と、生きることへの渴望の間で、キューバは、カクテルを手にしたあなたを、ルンバのリズムとサルサによって魅了します。ガソリン不足のため、至るところで見られる自転車、そして、あなたを虜にする魅惑的な宗教儀式と共に、チェ・ゲバラとヘミングウェイのキューバは、勇気と希望のレッスンを与えてくれます。
(*Cosmos Travel*1996)

紹介において、まずもって、抵抗とヒロイズム、そして不屈の忍耐のイメージを呼び起こす、指導者カストロの名という最大の国民的象徴によって、この国のはっきりとした他者性が示されている。そして、ツーリストは、普段の・毎日の生活（「内」における）に欠けているもの、すなわち夢を提供する場所というイメージを喚起され、惹きつけられるのだ。夢見ることが、親密でないもの、「異邦の」ものだけがもたらすことのできる、想像上の旅へとつながるのだ。ルンバとサルサへの言及は、これもまた夢見ることにおいて重要な

役割を果たしており、それは、社会文化的慣習と疎遠であるという点においても、日常と比べて高いレベルにあるという点においても、感覚への刺激を起こさせるものである。次に、革命の象徴であるチェ・ゲバラや、アメリカの著名な小説家ヘミングウェイは、思想と行動における比類なさと理想とを具現化する世界的シンボルへとキューバを結びつける試みとして用いられている。さらに、宗教的儀式は、ラテンの豊富さ、色彩、官能性、そして神秘性と結びつけるために話題にされている。

同じ雑誌で、エーゲ海のコス島の紹介は、「ヒポクラテスの哲学から夜のエンターテインメントまで」という題で始められている。読んでみよう。

船が港に入ると、聖ヨハネ騎士団の壮麗な城があなたを迎え入れます。それは、島に見られるイタリア風の建築への前触れなのです…。ヒポクラテスは、医学へのツアーを提供し、薬学の秘儀を授けてくれます。そして、あなた自身は、自転車に乗って、過去から現在へと旅し、「96年」の「シティ・オブ・ヨーロッパ」であると発表されたこの土地を発見するために、思い思いの旅程を計画すればいいのです。(*Cosmos Travel* 1996:126-127)

この一節において、広告的言説は、ギリシアのツーリストに向けて象徴を用いて、エーゲ海の島を「異国化」しようとし、それを「遠くの」ものにしていく。それは、城がもたらすイタリアの過去の建築における痕跡と、ツーリストを自然の「神秘」へと導くヒポクラテスの登場の両者への言及によってなされている。最初の言及は、島の歴史を強調し、二つ目の言及は、神話的性質を吹き込まれた実践と共に、この土地の固有性を示す。まさにツーリストを過去へと現在へと駆り立てることによって、語りは、どこか「歴史的な」場所へと赴くタイム・トラヴェラーの地位を人に対して与えるのだ。しかし、マーケティング戦略は、それでは終わらない。今日のコス島は、EUという強力で「疎遠な」存在の標準を満たしているという理由で、過去の（神秘的な）コス島と同等の重要性があるという印

象が創られるのだ。ヨーロッパとの関連づけは、単に得意がっていることを示しているだけでなく、かつて「内」であったものと比較することによる、大きな期待の創造を意味している。

広告産業によってしばしばなされる、旅にはツーリストの自己を変形する能力があるという主張にもかかわらず (Bruner 1991:241-242)、経験は、真正性 (authenticity) への探求の見地からは解釈されえない (MacCannell 1989)。一つの理由として、テレビ文化が、普通のことと、そうでないこととの間の区分を不明瞭にするということを挙げるができる。テレビ文化に根ざす、記号、イメージ、象徴といった表象的コードは、名所を日々の生活からアクセス可能なものとする。表象の指標的プロセスに関して、ロジック (1997:70-71) は、ツーリストの知覚が、もともとの対象に対し、視覚的、テキスト的、象徴的な表象の系列を当てはめることに言及している (ガイドブック、映画、テレビ番組、旅行者の話において)。指標化の概念は、諸々の表象の範囲に関係する。それゆえ、ツーリストの知覚は、諸要素の混合物から成っている。そのような諸要素は、主として映画やテレビ番組で見られる表象を当てはめるがゆえ、見ることはしばしば、反風土的な経験となる (彼/彼女の期待が満たされないと感じるという意味で)。さらに、見ることは、単独のオリジナルな意味を持たないことにもなる。というのも、映画やテレビ、文学作品からの文化的アイテムを指標とすることで、見ることに枠をはめるからである。電子的なものに由来するイメージは、土地に対する知覚に枠をはめる際、とても強い力を持つので、この型のリアリティにツーリストは抗うことができないのだ。ロジックは、ツーリストが旅行中に感じる楽しみや興奮が、ある部分、日課の切り換えに関係しているという議論をしている (Rojek 1997:55-56)。ツーリストを旅行へと促すのは、光景の真正性というよりも、新しい気晴らしへの絶え間なき欲求にあると言える。

民族誌家の旅行

異文化間の出会いの視覚的次元を主に強調するツー

リズムとは違い、民族誌は異文化間の出会いの論証的な側面に依るところが大きい。集団旅行をするツーリストが、旅の管理を他人に委ねる傾向にあるとすれば、民族誌家は、常に異なる文化への深い洞察に達するべく奮闘する。デュビッシュの議論 (1995:33)、すなわち、人類学者が研究旅行において、内では起こらない物事を経験するという議論、それは、言外にツーリストの旅とは異なっているということを言っているのだが、その議論を踏まえるならば、人類学者は、どのような自己についての気づきを民族誌家の旅行において得るのだろうか。1920年代のマリノフスキーによる旅行実践は、《他者》の社会において人類学者の能動的関わりが要求されるという、新しい知の枠組みの先駆けとなった。この意味で、民族誌家の旅行は、研究のプロセスおよび人類学者の経歴における決定的なポイントとなった新しい形態の探検・フィールドワークと同視されるべきものとなったのだ。マリノフスキーの先駆的事例は、民族誌的研究が調査者の自己の隠されていた側面、知られていなかった側面を明らかにすることを示し、逆に、自伝が民族誌に光を当てうるものであることも示した (Stocking 1983)。つまり、フィールドワークが、重要な個人的経験を、一般的な知識の領野へと結びつけるものであることを示したのだ (Hastrup 1992)。民族誌家の旅行が持つ探検の、際だった特質を理解するためには、《他者》との関係が、どのように経験され、明らかにされるのかを調べなければならず、また、経験が民族誌のテキストにおいて、どのように権威づけされるのか、また、人類学者が、筆者として、どのように自己と《他者》を構築しているのかを調べなければならない。

1920年代から30年代にかけての民族誌は、旅行者の記述と類似した部分が多かった。そのことは、筆者によって、《他者》を経験する他の場所への旅へと帰せられるような強調、すなわち、ロマン主義的想像力における旅の役割に見られるのと同じような強調のうちに、見て取ることができる。マリノフスキーは、その著書『西太平洋の遠洋航海者』(1922)において、メラネシア群島の土着の冒険を示すような彼の旅へと読

者の参加を促すものである。この著作は、旅行に含まれる冒険譚として見ることもできるが、ヨーロッパの大宇宙からトロブリアンドの小宇宙への寓話的な旅とも捉えることができる。『遠洋航海者』は、人間本性への隠喩的な旅として、人間本性のより深い理解に達するという見込みのもとになされた、異文化への潜入というヒロイックな試みとして特徴づけることができるだろう (Thornton 1985:8)。

マリノフスキーは、旅行経験を処理する中で、旅行記年譜に由来する自己像を紹介することで、参加する観察者の理想に接近する。『遠洋航海者』の有名な書き出しにおいて、彼は、次のように書いている。

突然、道具一式のみで、原始的な村の近くの熱帯の海岸に一人きりで漂着し、あなたの乗っていたボートも小舟も、見えなくなってしまったという場面を想像してみよう (1922:4)。

漂流者のイメージは、民族誌家にユートピアのモデルを連想させる。無知を特徴とした状況にある漂流者を考えることは、参加する観察者の理想に、ある仕方で接近することである。多くの古典的な民族誌は、どのようにして民族誌家が「承認された」参加する観察者へとその地位を向上させたのかを説明する、ステレオタイプな「出会いの神話」を含んでいる。そのような神話は、往々にして、民族誌家がはじめ無知であったことを描くことから始まる。すなわち、彼／彼女が、いかなる接触もしないがゆえ、混乱の状態にあったことを描き、必然的に誤解を引き起こすさまを描くのだ。隠喩的に言い換えれば、民族誌家の状況は、子供のような状態として描かれうるものである。しかし、時間が経つにつれ、混乱と無知は、成熟し、しっかりとした、信頼できる知識へと置き換わる。そのような「可塑性を示す」神話は、土着の社会への深い潜入の印象を作り出し、それゆえ、民族誌の仕事のその他の部分においても、筆者が、研究した社会のよき解釈者にして代弁者であるように見せる、内部からの洞察という印象を作り出す (Clifford 1988:39-40)。

近代民族誌のテキスト生産は、主に社会人類学の実証主義的歴史に影響を受けた。それは、活動の、中立的で、

非人格的で、科学的な性質を称揚するものであった。その結果として、「個人的な」ものは、研究者の経験が権威の一元化の資源として機能するかぎりにおいてのみ、明かされる傾向にあった。かつて、人類学者は、第一人称の「私」を、彼らの仕事と解釈者としての役割を妥当なものとするためだけに、民族誌の研究論文の重要箇所において導入したのだった (Clifford 1986; Pratt 1986; Rosald 1986)。そうでなければ、自己は彼らの著作から不在になってしまうがゆえに。さらに、到着の描写において、「私」は、西洋における旅の記述の伝統から引き出されたものではなく、フィールドワークの実践から引き出されたものでもなかった。「客観的な」観察と叙述から、自己および個人的な語りを分離することは、西洋の社会科学における、個人的なもの (感情的なもの) は「逸話でしかない」か、些末なことではかないものの領域へと押しやるという、長い伝統によって命じられたものである (Okely 1992:6)。しかしながら、自伝的な語りの抑制にもかかわらず、人類学的自己は、しばしば、想像力の産物へと変形される文学の中にも、日記の秘密の情報の中にも逃げ道を見つける。

マリノフスキーによって、日記は、自己を向上心に燃える科学者とは区別しうる場所、不安、怒り、混乱、そして最大の秘密である空想を表現することができる場所として用いられた。それゆえ、日記の公刊は、人類学の公的イメージに関して、大きな反発の原因となった。しかし、毎日の、間主観的な状況は、個人的なものを明らかにすることと結びついて、マリノフスキーの日記 (『厳密な意味における日記』1967年) に、まさに特別の価値を付与する要素を包含しているのだ。『日記』と『遠洋航海者』の双方を、記述の例として詳細に調べてみると、個人的／感情的なものとは理論的なものとは、容易に分けられるものではないし、認識的／知的なプロセスの全体から分離することもできないということを理解するだろう。クリフォードが論じたように

(1988:102-104)、民族誌の執筆、特に文化の神話の構築は、マリノフスキーにとって、自己の統一性に達するための手段として機能したのだった。彼の民族誌的な仕事において、自己と文化の構築された全体は、一文化の

方は機能主義的分析アプローチの結果であるが、アイデンティティの相互依存的寓話として見ることができる。

1960年代と70年代には、人類学者と、参加する観察者ないし解釈者としての自己との関係について検討する一連の民族誌に関する仕事が発行された。しかし、フィールドワークと結びついた個人的叙述は、「正式な」民族誌の巻とは別の巻として収められることが普通であった。このような分け方は、経験の公的／私的、客観的／主観的な側面に存する二元論的アプローチを示している。たとえば、コリン・ターンブルは、はじめ、一人称で書かれたコンゴのピグミーをめぐるフィールドワークについての記述的な報告を公刊し（1961）、5年後に、同じテーマの、より「客観的な」研究論文を公刊した（1965）。そのような状況は、民俗誌的対話や文化的《他者》との出会いに焦点を当てた、物語的民族誌が出現する80年代に変わり始めた。同時に、研究者が、政治的に中立な観察者でもなければ、安定し、一枚岩の、統一された自己であるわけでもなく、歴史的な存在で、専門分野に特有の分析的観点を持ち、また自らの個人的経験に影響された存在であるということも理解された。

人類学もツーリズムも、近代の経験を調停する文脈を提供する《他者》の表象を生み出した。他所や異国を象徴化することで、《他者》は、内のイメージ、場所、自己、力のイメージの逆を備えた媒介として機能した。論じてきたように、近代の旅行を駆り立ててきた興味・関心は、統御と秩序を求め、それを負うことによって作り出される論証的空間の内に位置づけられるべきものである。《他者》の「私物化」のプロセスにおいて、人類学的実践、旅行の実践は、既に確立された自己と《他者》のイメージを問い直すのではなく、むしろ、それを強化する傾向にあった。この話題は、自己のアイデンティティの問題に及び、特定の歴史的な文脈における力の構造に関連づけられないかぎりには、理解され得ないものである。人類学者が多様な文化のリアリティを解読しようとすることは、人々自身のイデオロギーのモデルに対して表象の領域を割り当てつつ、「リアルな」ものとして想定される《他者》のものの見方を生み出すことにつながる。この権威づけられた優越な位置は、とりわけ、人類学者

の専門家としてのアイデンティティの政治的機能を明かしている。それは、客観的な「科学」になろうという人類学者の関心事と、まさに同列のものである。「科学」は、実際、研究者の旅行経験を、彼／彼女の解釈の努力の一部として認めることの決してないものなのだ。それと同じ関心事によって、人類学者は自らとツーリストの間の類似性についての話題を考慮したがるのだ。

ツーリズムの場合、近代における発展の経路は、多様な文化的風景を独占的・エリート主義的に「読解すること」による浸食を示していた。ツーリズムがポストモダンの先駆者として受け取られることの一因として、この質的な変形が挙げられる。ポストモダンの時代は、次のものに特徴づけられる。すなわち、イメージと象徴が拡散したこと、および、マス・メディアによって、ツーリストのまなざしによる典型的な対象物を見ることが容易になり、ツーリズムが各家庭の内に入り込んだことである。ツーリストの実践の「伝統的な」特質のアクチュアルな表現、ツーリストの実践と社会の他の部分との分離は、もはやありそうにないことで、この進展は、ツーリストの実践の「教養化」に道を開いた。ポストモダンの時代におけるツーリズムに関するアーリの議論（1990）は、記号がまなざしの代用品から成っており、かつ、まなざしは、記号なしには存在し得ないとしている。旅行の観念を呼び起こす記号は、今日、文化産業によって大量生産されており、それは、内と外、仕事と旅行、真正なものとして創られたものといった概念間の内的区分の衰退の結果である。この進展の方はと言えば、表象の大衆的支配を反映しているのだ。

ポストモダンにおける旅行

民族誌家や旅行作家、詩人の作品は、今や、それが含みうる自己提示や自己変革の物語を探すために調べられているのかもしれない。まなざすことを超え、これら三種の旅行者は、訪れた場所の風景や文化との密接な接触、交流をするに至ったという事実は、彼らの語る自己の物語を比較するための共通の基盤を構成している。さらに、民族誌の空間的・テクス的な

実践と、「単独」旅行での、そうした実践との比較は、旅行者と民族誌家の関係に光を当てる。

フィールドワークのハビトゥスが、旅行のハビトゥスに対立するものと定義されていた過去とは違い、今日では、境界の溶解—個人的なもの、専門的なもの、自己と他者、理論と経験の境界の溶解—に関わるポストモダンの理由によって、文学的旅と学術的フィールドワーク、学術的分析と旅行の語りとの境界線は、再調整されている。旅行も、旅行のようなフィールドワークも、打ち解けなさ、免除特権、不理解、固定観念といった、多くの似たような問題と格闘しなければならないことが認められる。概して、旅行とモビリティにより、ポストモダンの世界は、文化地理学の継続的な再整理を経験しており、かつては安定していた区別、すなわち、親密なもの、疎遠なものとの区別、自己と《他者》との区別、そして同様に、人類学的研究が行われていた「フィールド」についての因習的な観点、これらの基礎は危うくされている。これらの状況に対する反作用として、自己に向けられた民族誌家のまなざしという新たな志向が増加しており、自己は、文化的経験の解釈のための適切な場所として捉えられている。

デュビッシュは、自己発見の民族誌的旅としてのフィールド調査を認識し、彼女がフィールドへと持ち込んだアイデンティティについて、彼女の調査がもたらしたものについて、彼女が自分自身について学んだことについて、そして、彼女のフィールドワーク経験が世界観に影響を与えたかどうかについて、報告している。彼女の著作『他なる場所において—ギリシアの島の寺院における巡礼、ジェンダー、政治』（1995）は、ポストモダンの再帰性の好例である。デュビッシュは、はじめ、1969年から70年にかけてエーゲ海のティノス島でフィールドワークを行った後、1986年の夏に、島で人気の寺院の調査をするために再訪している。そのとき、彼女の精神的・身体的苦しみに起因する重大な背景事情により、彼女は、なぜ苦しみが人々を寺院での癒しへ誘うのかを理解した（1995:33）。デュビッシュは、フィールドワークを行う中で、自己再帰的プ

ロセスを経験し、それがこのような理解の背景となったのだ。巡礼を通じ、自分自身についての新しい気付きを手に入れる形で、彼女は自分自身の苦しみに意識的になったのだ。また、はじめのフィールドへの旅、文化的境界の通過について振り返ることにより、デュビッシュは、それによって関心と感情的反応を知った、かつてのいくつかの前提について、その正当性を疑うことになった（1995:216-217）。再帰的な人類学が感情的なもの、客観的なものとの境界を批判するに至り、フィールドワークの機能を内的旅として受け取るという枠内において、人類学者は、彼／彼女が経験したものの感情的な反応と同様に、彼／彼女の経験をも認識するよう強いられるのだ（Rosalind 1989）。デュビッシュの内面の旅が、かつて彼女が持っていたギリシア正教会の礼拝への否定的態度の理解を含んでおり、それゆえに、自己探究と自己への気付きのプロセスを構成要素とするものとなったのだ。

デュビッシュはフィールドワークの間に、それまで経験したことのない感情を経験し、自分自身の文化について振り返り、自らのアイデンティティについて問うような瞬間があったと述べている。さらに、外部の人間と内部の人間、観察者と参加者の間に引かれた境界を越えていると感じる状況に直面し、デュビッシュは、観察と参加というフィールド調査における二つの構成要素が両立不可能であると理解するに至った。観察が、ツーリストのスタンスに似た一定の距離を必ず伴うのに対し、参加は、感情を含んで巻き込まれることを示しており、ゆえに、分離と観察とは違うのである（1995:116）。デュビッシュは、感情を理解のための媒体へと変質させることで、また、自己と《他者》のカテゴリーを、区別され、分たれたものとしてではなく、相関関係のあるものとして見ることにより、このディレンマを解消しようとした。同様に、彼女は、人々が彼女のことをどのように位置づけるのか—関係的に、状況的に—、また、自らの伝記と経験において、自分自身をどのように位置づけるのかに依拠する形で、ツーリスト、人類学者、巡礼者との境界の概念的な不明瞭化を考慮した。

『ヘラクレスの柱—地中海のグランド・ツアー』(1995)において、旅行作家のセルーは、何よりもまず、ツーリストたちと、その振る舞いに対する軽蔑をあらからさまに示している。実際、彼は、ツーリストから身を離し、旅行活動の単独的性格を強調している。同時に、彼の言う意味での、経験における自由と新しさを保護するために、多様な手段、すなわち、オフシーズンの旅行をすとか、飛行機を使わないとかいった手段を用いた練り上げをしている(1995:489)。セルーの旅行への期待を高めるものは、具現化された経験を追求することである。彼が認めているように、旅行することは、あらゆる感覚に関係しており、感情の混合物として彼の中でわき上がってくるものである。この点は、旅行者とツーリストの区別に関する議論を補強するものである。というのも、ツーリストの経験は、主に視覚的なものに限られるからである。

セルーが、旅行の反対物、すなわちツーリズムとは根本的に無関係であるという立場をとっているにもかかわらず、旅行者としての彼のアイデンティティの曖昧さに関して直面するディレンマを隠そうとはしない(1995:47-48)。このようなアイデンティティについての話題は、彼の試みの気ままさに関係しており、セルーの意識において、ある場所から他の場所へと自由に移動するということが、仕事や、生産的あるいは家族に関する日常生活の一部としては見なされていないのだ。弱々しく、意味のない行為には見えないものとして正当化されるためには、書くにあたって、体系的観察をするしかないのである。それゆえ、セルーのアイデンティティに関連したディレンマへの解決法は、次のような確信に存していた。すなわち、そこにいるということが、それ自体、目的なのではなく、体系的観察をし、それについて記すための課題を供するものであると確信することである。次のようにも論じられるだろう。旅行作家としてのアイデンティティの形成は、多様な場所と出会いの交差を含んだ、単独旅行の様態に基礎づけられた、物語的叙述の創造を経て成立するのだ、と。セルーが終生、旅行をして過ごすことと述べていることは、「人生を旅になぞらえる本質的な修辞」

(Fussell 1980:210)の使用と区別することができる。旅行は、成人期および成熟に到達するための基本的な手段として供されるのだが、セルーの探求の対象は、未知のもの、過去を表象するという意味では、隔たったものであった。既知のもの、地中海的なものは、未来という変化に特徴づけられた時間を表象する。セルーの感情(1995:6-7)から次のように演繹することができる。すなわち、彼が周縁へと旅することによって得た成熟は、彼の気付きと夢を持続することを可能にしたばかりでなく、よく知った地中海に新しさを見出すことをも可能にしたのである。

地中海の文学史は、セルーが訪れる場所を選ぶにあたって、主要な指針であった。そこに描かれていたのは、外国の作家が発見し、書き記した場所、場合によっては住みさえした場所であるがゆえに有名になった場所である。セルーが訪れた場所での経験において、神秘的、魅惑的、あるいは当惑させられると感じたものは、それが外的リアリティの条件に関して明らかにするがゆえというより、旅行経験そのものについて明らかにするがゆえに重要であったのだ。ときに彼が出会った人々の生活の一局面を強調するのは、前近代の農村的世界における人間の交流の典型だと感じたからである。一方、よく知られたツーリズムの目的地を叙述するとき、彼は嫌悪、シニシズム、明らかな落胆を隠そうしない(Theroux 1995:35)。これらのケースにおいて、セルーは、ツーリストの訪れる場所をリアリティの外側に追いやったフッセル(1980)と共鳴している。

また別の立場もある。パトリア・ストレースは、90年代初頭に一年間ギリシアに住み、『ペルセポネーとの晩餐』(1996)にその印象を書き綴った女性詩人である。本のはじめの方では、ギリシアを理解しようという欲望が、彼女自身を理解する必要に由来していると述べているが、ストレースの自己発見の旅は、自伝的な意味で聞くことはできない。彼女は読者に対して、直接的経験がどのように一種の自己再帰性を起こさせるのかを滅多に明らかにしはしない。さらに、自己再帰性は、自己変革に帰着することはなく、彼女の自信に

随伴する肯定とともに、傷つきやすさへのストレスの気付きをあおるのである。概して、ストレスは内的経験を探索することを避け、ギリシアでの感情的投資についてほとんど明らかにせず、出てくる判断への反応は、彼女に心中を打ち明けた者に対するものに限定したのだ。

ストレスの作品に自己再帰性と自己への問いかけの調べを与えているのは、鏡への言及においてである(1996:123)。それは、彼女自身のむしろ不確かなイメージを示しているように見え、おそらく、このような装置を用いることは、ポストモダンの時代のアイデンティティに関するイデオロギーを伝えるものである。今日、多くの思想家が、アイデンティティがより安定したものと捉えられていた前期近代に比して、多様であることを受け入れ、変化を被りうるアイデンティティというものを認めている(Bauman 1996; Kellner 1992:174)。しかしながら、ストレスの断片化され、変わりつつある自己像を映し出す鏡もあれば、まっすぐに向かい、それが映し出す像への問いかけの余地がない鏡もある。かくして、ストレスが、ギリシア社会の鏡としてテレビを見るという傾向、ギリシア人全体の鏡として友人たちを見る傾向は、《他者》を一般化し、同質化する畏を、彼女が避けられていないことを曝け出している。実際、彼女は彼女自身の「私たち」というカテゴリー(アメリカ人)にのみ、異質性が属すると考え、「彼ら」というカテゴリー(ギリシア人)を同質化するのだ(1996:172-173)。

ストレスが投じる自己像は、情報に通じた旅行者の自己像、すなわち、自らの自信と、ギリシアのリアリティの解釈における自信を誇示し、文化理解へと中心化された知的関心を満足させることを追い求める旅行者の自己像である。民族誌的調査の試みにおける内的な旅と外的な旅の、双方の重要性を認めたデュビッシュとは異なり、ストレスは内的経験のレベルが、旅行の空間的・時間的次元と接していないような印象を与える。また、セルーがツーリストから自分自身を隔たせることを重視したのに対して(Dann 1999:172-173)、ストレスがこのことに関心を寄せた

ようには見えない。彼女は、少なくとも友人や知己との社交というレベルでは、地元の人々とあえて関わろうと努めたが、それは《他者》との出会いを、公共の場所における即興の会話に限定したセルーとは対照的である。実際、セルーは、彼が通過する空間に住まう人々からよりも、わざわざ彼が出会おうとする他の旅行者や作家の生涯においてこそ、より多くの意義を経験しているように見える。

セルーの自己像は、旅行において慰めや快適さを必要とせず、禁欲的に、快適でなく、不愉快ですらある経験に耐え忍ぶという「リアルな」旅行者の自己像の一つを示している。確かに、セルーとストレスは、異なる経歴とジェンダー・アイデンティティゆえ、異なる見方を経験している。しかし、両者とも、《他者》を一般化するという畏および、はっきりと区別された他者性を際立たせるために固定観念(多くの場合、否定的な)を用いるという畏に陥っている。概して、彼らの行動は広い意味での観光者(sightseers)の行動であり、デュビッシュがそうしたように、内部の者としての地位を保持するための通過儀礼を経験したとは言えない。そして、デュビッシュとは異なり、セルーもストレスも、彼らが旅した場所と、彼らの元々いた場所との弁証法的関係に注意を促すことで、旅した場所について理解するというところに自覚的でないように見えるのだ。

結論

旅行者、民族誌家、ツーリストは、彼ら自身に似たものを探しつつ、他所や《他者》の中へまなざしを向ける観察者だと捉えることができる。彼らの話すことや書いたものは、彼らが《他者》の世界を、自らのものであると主張するために覗き込んでいることを示唆している。文明化されたものと未開のもの、近代的なものと伝統的なもの、慣れ親しんだものと異国風のもの、そして自己と《他者》という対立が、大航海時代以来の西洋社会の言説領域を支配してきたのだ。民族誌においても、旅行文学においても、《他者》の表象は、それを仲介として近代の経験を成り立たせるものであ

った。民族誌の仕事は、人類学者が、進歩と郷愁の間の緊張に閉じ込められた近代の世界と「異国性」とを調停しようとする努力を、テキスト生産を通じて反映している。グラバーン(1995:166)によれば、郷愁は、多くのタイプのツーリズムの推進力ともなっており、特筆すべきは、商業的ないし政治的操作を受けやすいということである。旅行者と同じく、民族誌家は、次のような理由で(異国風の)《他者》を理解したのだ。すなわち、《他者》が、近代世界において見出すことのできない性質という意味での差異に固有の(身体的な、あるいは、知的な)異議申し立てへの機会を保証してくれるのと同様、冒険への機会を保証してくれるという理由である。しかしながら、《他者》を通じた自己の経験は、究極的には、制御と秩序を追い求めるものとなり、また、それらを課されたものとなる。歴史において、コロニアリズム、伝道、民族誌的調査、そしてツーリズムは、自己表象の探求に対して、十分な捌け口を提供してきた。近代に固有の性質である個人主義、モビリティ、そして細分化の外観のもと、そのような探求は、理想的で完全な共同体への郷愁によって動機づけられてきたのだ。このプロセスの最終的な結果は、諸文化、諸社会、諸地誌の対象化であった。

ここ数年、モビリティのメタファーが、自己と《他者》、慣れ親しんだものと異国風のものといった、人類学者の固定的で、自民族中心主義的なカテゴリーを脱構築するのに役立っている。より重要なのは、自己再帰的な人類学の進展、すなわち、自己自身への気付きと、《他者》の声への当然与えられるべき信用の重要性への気付きを伴う進展が、参加する観察者の主観性の問題を軽減するのに寄与するものとしてあるということである。自己再帰的な傾向の中には、調査の経験を通じた自己変革を報告するフィールドワーカーもいれば、自己発見の旅として調査を経験したフィールドワーカーもいる(Reinhartz 1992)。自伝の創造的使用に興味を持つ人類学者は、次のことを認める。第一に、民族誌家がフィールドに持ち込むアイデンティティが、民族誌家や学者の包括的な説明の下に包含されたり、隠されたりしてはならないということ、そして第二に、

彼/彼女が他の社会や民族集団の中に入ることが、自己規定の境界を通過することを相伴っているということである(Okely 1996)。

人類学におけるように、ツーリズムおよび旅行についての研究においても、ある種、不動のものであったカテゴリーを脱構築する試みがなされてきている。文学において、旅行と同じく、ツーリズムという言葉は、正反対の《他者》との対比において定義されてきた。このような二分法は、ツーリズムとその正反対の《他者》とが、収束することも、さらには連続体を形成することさえ決してないほどに区別され、分離されたものとして知覚されてきたという意味で、定義を問題含みのものとする。ツーリズムを脱構築しようとする努力は、本質的に、構造主義的視点の批判から始まっている。このような批判の系は、ツーリズムを、そうではなくて、プロセスとして取り上げるべきという見解である(Abram and Waldren 1997:2-3)。このような分析的視点の優位性は、ツーリズムに関する経験の多様な性質を強調することができ、同時に、旅行する人々の志向における変化を、時代を通じてたどることができるという点である。概して、プロセスとしてのツーリズムの概念は、ツーリストのアイデンティティが、静的なものでも不変のものでもないという理解に基礎を置いている。それゆえ、次のように仮定することができる。すなわち、毎年同じ場所へと戻ってくるツーリストは、その場所のさまざまな意味を明らかにしようとしており、その場所が彼らにとって経験の空隙を満たすものであることを発見しようとしさえするのだと。そのようなツーリストにとって、海外こそ、自分の属する場所だと感じることでできる場所、単に通過するのではなく、住む場所なのであろう。彼らの知覚において、定期的に訪れる場所を特徴づけるのは、おそらく、《他者》と時間と経験を共有することであろう。

さらに、セルーのような旅行作家が、ツーリストを真の敵であると考え、自身を旅行者のカテゴリーに割り当てようとするのにもかかわらず、彼らが《他者》と時間と経験を共有しているとは考えないだろう。というのも、彼らは消失したリアリティの痕跡を追って

いるからである。旅行者は、外的世界を感覚するにあたって、文学のテキストや他の旅行者の報告に多くを依っており、ツアー運営者や広告の言説に依るところは少ない。このことは、テキスト・ジャンルが、テレビやインターネットといった、まなざしに焦点を当てるポストモダンの視覚的メディアと今なお、肩を並べるのに成功していることを示している (Dann 1999:161)。しかしながら、彼らの生み出す作品を通じて、旅行者は、ツーリストに消費されることになる記号のレパートリーに追加される新しいイメージを生み出していると言える。この意味で、セルーとストレスは、ギリシア人らしさ、イタリア人に典型的な振り舞い、トルコ人やギリシア人がお互いに、あるいは、馴染みの薄い者に向けてとる典型的な態度といった記号を、ツーリストが探すのを可能にするような追加的要素を提供するのだ。しばしば旅行者において見られる、このような実践とは対照的に、人類学者は、彼らが研究し、還元主義的論理を適用することなしに、地方と国民全体のレベルの間の結びつきを探すような共同体の固有性を論証する。この意味で、人類学者は、旅行者が探す自給自足の共同体の概念に対して、異議申し立てをしてきた。

最後に、再帰性の話題に関していえば、再帰性は、《他者》との関わりという状況において、民族誌家および旅行者の自己分析への洞察を与えうるものである。再帰性は、経験の結果であり、他なるものに意味を与える資源としての自己の自覚的使用に関連するものである。本論において検討された諸例の中で、デュビッシュの民族誌的報告だけが、自己再帰性の創造的な使用を明らかに示している。それは、いかにして人類学者が、自己の多様な次元を活性化しうるのかを示し、いかにして《他者》が、内における彼女の状況という条件を反映して、背景へと退くのかを明らかにしている。外国らしさを探して周縁を旅する旅行作家は、旅行の内的次元に自覚的であるが、自己再帰的な仕方によってそうしているのではないことは明らかである。セルーのように、彼らは基本的にツーリストから隔たったところに身を置くことを追求するだろうが、このよう

な気遣いは、彼らのアイデンティティの感覚の本質的な要素なのだ。ストレスのように、もっぱら、言語的、社会的、文化的本性の観察を、解釈者の(権威づけられた)説明へと改変する作家の自己を映し出そうと望む者もいるだろう。だが、そのプロセスにおける彼/彼女の自伝的役割は隠されているのだ。そのような旅行作家は、人類学者とは異なり、次のことに自覚的ではない。すなわち、彼らが《他者》に関して生み出すイメージや物語が、彼らの文化に属するアイデンティティと関心へと直接的に結びついたものであるということに、自覚的ではないのだ。(完)

参考文献

Abram, S., and J. Waldren

1997 Introduction: Identifying with People and Places. In *Tourists and Tourism: Identifying with People and Places*, S. Abram, J. Waldren and D. Macleod, eds., pp. 1-11. Oxford: Berg.

Andonopoulou, A.

1997 J.J. Bachofen: The Greek Voyage. In *Minutes of the International Symposium on Travels to Greece in the 18th and 19th Centuries*, pp. 27-36. Athens: University of Athens (in Greek).

Augustinos, O.

1994 *French Odysseys: Greece in French Travel Literature from the Renaissance to the Romantic Era*. Baltimore MD: The John Hopkins University Press.

Bauman, Z.

1996 From Pilgrim to Tourist, Or a Short History of Identity. In *Questions of Cultural Identity*, S. Hall and P. duGay, eds., pp. 18-36. London: Sage.

Boorstin, D. J.

1964 *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*. New York: Harper.

Bruner, Ed

1991 The Transformation of Self in Tourism. *Annals of Tourism Research* 18(2):238-250.

- Butler, J.
1993 *Bodies that Matter*. New York: Routledge.
- Clifford, J.
1986 On Ethnographic Allegory. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 98-121. Berkley CA: University of California Press.
1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature and Art*. Cambridge MA: Harvard University Press.
1997 *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Cosmos Travel.
1996 *Cosmos Travel*, Summer issue 17.
- Crick, M.
1985 "Tracing" The Anthropological Self: Quizzical Reflections on Field Work, Tourism, and the Ludic. *Social Analysis* 17:71-92.
- Dann, Graham
1999 *Writing Out the Tourist in Space and Time*. *Annals of Tourism Research* 26(1):159-187.
- Derrida, J.
1981 *Positions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dubisch, J.
1995 *A Different Place: Pilgrimage, Gender and Politics at a Greek Island Shrine*. Princeton NJ: Princeton University Press.
- Fabian, J.
1983 *Time and the Other: How Anthropology Makes its Subject*. New York: Columbia University Press.
- Fussell, Paul
1980 *Abroad: British Literary Travelling between the Wars*. New York: Oxford University Press.
- Graburn, N.
1995 *Tourism, Modernity and Nostalgia*. In *The Future of Anthropology: Its Relevance to the Contemporary World*, Ahmed A and C. Shore, eds., pp. 158-178. Atlantic Highlands NJ: The Athlone Press.
- Hastrup, K.
1992 *Writing Ethnography: State of the Art*. In *Anthropology and Autobiography*, J. Okely and H. Callaway, eds., pp. 116-133. New York: Routledge.
- Herzfeld, Michael
1987 *Anthropology through the Looking Glass: Critical Ethnography in the Margins of Europe*. Cambridge: Harvard University Press.
- Kellner, Douglas
1992 *Popular Culture and Constructing Postmodern Identities*. In *Modernity and Identity*, S. Lash and J. Friedman, eds., pp. 141-177. Oxford: Basil Blackwell.
- Laclau, E.
1990 *New Reflections on the Revolution of Our Time*. London: Verso.
- Livingstone, D.
1857 *Missionary Travels and Researches in South Africa*. London: John Murray.
- MacCannell, D.
1989 *The Tourist* (2nd ed.). London: Macmillan.
- Malinowski, B.
1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London: Routledge & Kegan Paul.
1967 *A Diary in the Strict Sense of the Term*. London: Routledge & Kegan Paul.
- McGrane, B.
1989 *Beyond Anthropology: Society and the Other*. New York: Columbia University Press.
- Minh-ha, T.
1994 *Other Than Myself/My Other Self*. In *Travellers' Tales: Narratives of Home and Displacement*, G. Robertson, M. Mash, L. Tickner, J. Bird, B. Curtis and T. Putnam, eds., pp. 9-26.

- New York: Routledge.
- Neuman, M.
1992 *The Trail Through Experience: Finding Self in the Recollection of Travel*. In *Investigating Subjectivity: Research on Lived Experience*, C. Ellis and M. G. Flaherty, eds., pp. 176-201. Newbury Park CA: Sage.
- Okely, J.
1992 *Anthropology and Autobiography: Participatory Experience and Embodied Knowledge*. In *Anthropology and Autobiography*, J. Okely and H. Callaway, eds., pp. 1-28. London: Routledge.
1996 *Own or Other Culture*. London: Routledge.
- Pratt, M. L.
1986 *Fieldwork in Common Places*. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 27-50. Berkeley CA: University of California Press.
- Reinhartz, S.
1992 *Feminist Methods in Social Research*. New York: Oxford University Press.
- Rojek, Chris
1993 *Ways of Escape: Modern Transformations in Leisure and Travel*. London: Macmillan.
1997 *Indexing, Dragging and the Social Construction of Tourist Sights*. In *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory*, C. Rojek and J. Urry, eds., pp. 52-74. London: Routledge.
- Rojek, C., and J. Urry
1997 *Transformations of Travel and Theory*. In *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory*, C. Rojek and J. Urry, eds., pp. 1-19. London: Routledge.
- Rosaldo, R.
1986 *From the Door of His Tent: The Fieldworker and the Inquisitor*. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 77-97. Berkeley CA: University of California Press.
- 1989 *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*. Boston: Beacon Press.
- Stocking, G.
1983 *The Ethnographer's Magic: Fieldwork in British Anthropology From Tylor to Malinowski*. In *Observers Observed: Essays on Ethnographic Fieldwork*, G. Stocking, ed., pp. 70-120. Madison WI: University of Wisconsin Press.
- Storace, Patricia
1996 *Dinner with Persephone*. New York: Pantheon Books.
- Theroux, Paul
1995 *The Pillars of Hercules: A Grand Tour of the Mediterranean*. London: Penguin.
- Thornton, R.
1983 *Narrative Ethnography in Africa, 1850-1920: The Creation and Capture of an Appropriate Domain for Anthropology*. *Man* 18:502-520.
1985 *Imagine Yourself Set Down ... March, Frazer, Conrad, Malinowski and the Role of the Imagination in Ethnography*. *Anthropology Today* 1(5):7-14.
- Turnbull, C. M.
1961 *The Forest People: A Study of the Pygmies of the Congo*. New York: Simon and Schuster.
1965 *Wayward Servants: The Two Worlds of the African Pygmies*. London: Eyre and Spottiswoode.
- Tyler, S. A.
1986 *Post-Modern Ethnography: From Document of the Occult to Occult Document*. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, J. Clifford and G. Marcus, eds., pp. 122-140. Berkeley CA: University of California Press.
- Urry, J.
1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in*

-
- 1 cf. 遠藤英樹『観光社会学の歩き方』、春風社、2007年、1講。
 - 2 cf. 大橋昭一『観光の思想と理論』、文眞堂、2010年、13-17頁。
 - 3 ギリシア北部の山脈。
 - 4 いずれも武勲詩の作者。
 - 5 社会学者ブルデューの用語。当人に意識されないままに獲得され、持続的に機能する性向の総体。